

民俗資料館だより

March 31st, 2018

KAMO CITY MUSEUM OF HISTORY NEWS No. 25

加茂市民俗資料館
館報 第25号

平成30年3月31日発行

編集・発行

加茂市民俗資料館

「平家琵琶の保存」

加茂市文化財調査審議会委員

中野保榮

加茂市教育委員会は平成19年7月、加茂市在住の小林均氏の伝えて来た「平家琵琶」に対して、芸能分野の文化財として個人指定している。氏は長年高等学校に勤務し、昭和54年から一時県内の文化行政を担い、加茂文化会館建設にも関わりをもたれた人である。

氏は国語科教師として、教科書で扱われる『平家物語』や『能楽(謡曲)』について、たんに古典としての文章だけでなく、古い時代に芸能として実演されて来た実際の様子を生徒に教えるためにこの道に進まれたと言う。中でも「平家琵琶」の演奏は現在では珍しく、過去に盛んであった室町時代から江戸時代までは全国的にも囃されていたが、明治以降はほぼ伝承者は存在しなくなっていた。

我が国の琵琶楽の中には、平安時代から宮中や大きな神社・寺院で演奏されてきた雅楽琵琶、江戸時代に九州盲僧琵琶から発展して薩摩地方におこった薩摩琵琶、明治中期同じく盲僧琵琶の流れをくむ筑前琵琶がある。平家琵琶は古典『平家物語』の文章以外の曲目を語る事がなく、伝統堅持の宿命がある。薩摩琵琶・筑前琵琶は時代に反映させる新曲を作る自由さがある。現在薩摩琵琶は約1万人、筑前琵琶は数10人の演奏者・愛好者がいる。

明治40年10月新潟新聞の「加茂雑信」に、「筑紫琵琶と懇和會 加茂農林學校に於いて武士道鼓吹の為來る十一月三日東京より橘知定氏及び其の令嬢を招待し筑紫琵琶の彈奏會を催す 加茂懇和會も同氏を聘し同日石田楼に秋季大會を開催すと云ふ」との

記事が載る。筑紫は筑前の誤り。筑前琵琶は初代橘智定が薩摩に出かけて薩摩琵琶を研究し三味線音楽の手法をとり入れて明治26年に新琵琶楽を創作し、29年に上京し筑前琵琶を演奏。この記事の知定は智定の娘婿にあたり、流派を橘流と呼ぶ。

加茂市内では戦前も、然るべき家には薩摩琵琶の琵琶床が用意されていたと言われる。

小林氏が『平家物語』の勉強を始めた頃には、平曲の伝承者は名古屋市3検校(けんぎょう)と仙台市の館山甲午(たてやまこうご)氏の4人のみであった。館山氏の家系は弘前(ひろさき)藩主の側用人(そばようにん)に連なる。藩主参勤の折に、共に江戸の麻岡(あさおか)総検校から平曲を習い、それに伝えてきたものである。

小林氏は、昭和44年国立劇場での「平曲」公演を聴聞。同年末、米人ギッシュ氏の設立した平家琵琶普及後援会に入会し、館山甲午氏の指導を受ける。以来職場が県境に移る迄の17年間、毎月上京して館山氏と高弟の後藤光樹氏の元で修行。昭和54年、当時としては5指に入る前田流平家詞曲の相伝資格を得る。平成24年3月、平家琵琶と謡曲の指導に対して加茂市の特別表彰を受ける。

氏の演奏活動には自作の琵琶を披露した昭和50年神田の岩波ホールをかわきりに100回を超す。ごく最近では平成29年10月、琵琶法師ゆかりの両国の江島杉山神社、日比谷図書文化館では、平曲修業当初の仲間達、米人ギッシュ氏や甲午先生の子息館山宣昭氏らとの懐かしい演奏の機会をもち、感慨ひとしおであったと言われる。最後に小林均氏から多くのご教示を賜り厚く御礼申し上げます。

館外活動

1 社会科出張授業

期日 29年4月14日 七谷小学校6年生
29年4月18日 須田小学校6年生
内容 縄文時代・弥生時代の社会を探ろう

2 映像で振り返る「懐かしの加茂」

期日 1回目 29年 8月12日(土)
2回目 29年11月28日(火)
時間 午後2時～3時30分(1・2回とも)
会場 加茂市立図書館 視聴覚室
一般参加者 1回目17名・2回目14名
映写内容
ア 「歴史散歩(加茂)」
イ 「昔を偲ぶ加茂の風景」
ウ 「国体ハイライト」

3 古文書講座

時間 午後7時～8時40分
会場 加茂市公民館第1研修室

第1回

平成29年9月5日(火) 一般参加者25名
講師 関 正平 先生
(加茂市文化財調査審議会委員)



テーマ「庄屋太郎左衛門がみる上条村の村高」

【講座内容】

寛政元年(1789)12月幕府領となった上条村庄屋中澤太郎左衛門から新発田藩郡役所帳元遠藤弥七宛ての書付けである。

幕府領となった上条村は、御役物は全て村高に応

じて賦課させられた。幕府大貫代官へ引き渡された寛政2年7月の高(上条村高815石1斗7合)と延宝年中検地帳記載の高は相違している村は大変迷惑している。上条村でも50石近く差があった。それで中澤太郎左衛門は幕府水原役所へ出張の折、この差があるのは何故か聞かせて頂きたいと願った。

寛政3年2月付け帳元よりの端書写し。水原陣屋へ願い出た際に新発田に行き村高について聞くことになった。それによれば、村々で使っている高は4代藩主溝口重雄の貞享2年(1685)に幕府へ届け出た高で、寛政2年7月の高と相違していることが分かり、寛政元年以前に村々へは、貞享2年の高であった。

第2回

平成29年9月12日(火) 一般参加者22名
講師 長谷川 昭一 先生
(加茂市文化財調査審議会副委員長)



テーマ「明治34年加茂織物調査報告より(2)」

【講座内容】

明治34年「新潟県染織物業調査報告書」をもとに、加茂の織物業の賃金労働条件等の記述を解説した。今回の史料「新潟県染織業調査報告書」は明治34年に東京高等商業学校(現一橋大学)3年生水谷新太郎が新潟県内の主要織物産地の生産内容や組織などの調査報告である。

調査報告書による加茂町の雇用者の労働条件は下記の通りである。

【操業時間】 夏季は午前6時～午後6時

冬季は午前7.8時～午後9時

【休日】 毎月1日と15日

他に正月・お盆・加茂祭り

【賃金】 俸給は出来高で一定しない。5月と

盆と年末の3期に分けて支払い。

第3回

平成29年9月19日(火) 一般参加者24名

講師 溝口 敏磨 先生

(加茂市文化財調査審議会委員長)



テーマ「明治30年加茂町助役の選出」

【講座内容】

明治30年3月に開かれた「第1回加茂町会議事録」から同年9月30日の「第8回加茂町会議事録」をもとに、加茂町有給助役設置までの話し合いを解説した。

石井百太郎助役の辞職申し出に対して、助役の仕事は住民としての義務であり、誠に遺憾であるという意見が出された。そこで留任を勧告する委員3名を投票で選び、再三にわたり留任を勧告したが辞職の意思は固かった。

誰も助役を受けてくれる者がなく、町政がうまくいくには選挙しかないという事で選挙を行った。

結果石田友蔵氏が選ばれたが、石田氏は「老衰のため助役の任ができない」と辞任書を提出した。

議会は無給では助役になる人がいないとして、有給助役を置くことを決めた。その結果、小林兼二氏が有給助役として推薦され(月給15円)半年間に及ぶ石井百太郎氏の後任の問題が決着した。

第4回

平成29年9月26日(火) 一般参加者24名

講師 佐藤 賢次 先生

(加茂市文化財調査審議会委員)



テーマ「文永8年(1271)の

二つの青海荘地頭史料を読む」

【講座内容】

蓬左文庫は名古屋市博物館所蔵で鎌倉時代の古文書を集めたものである。加茂市の事について記述されている最も古い文書史料になる。

文永8年(1271)鎌倉時代の中頃、石河庄(江戸時代の加茂町村)と青海庄(加茂川右岸下条と田上町)の二つの荘園が争った訴訟史料である。

青海庄垣生田(羽生田)村を支配した陸奥国の御家人の動向を記した文書が知られている。青海庄は、応保2年(1162)鳥羽上皇が高松院妹子の女院領として成立した荘園である。このうち青海庄曾祢新保は地頭下総太夫泰俊の所領となっており、その代官西念が現地で支配していた。

この二つの史料から、青海庄の曾祢新保は地頭下総氏の代官、埴生田は陸奥国を本貫とする伊達支族の石田氏が支配していたことが分かり現地では雑掌が在家と呼ばれる村の有力農民で掌握していた。雑つまり、加茂・田上地域の地頭は現地支配を雑掌に委ね、在地に根を下ろして領主化はしなかったことがこの地域の特徴である。

第5回

平成29年10月3日(火) 一般参加者23名

講師 丸山 朝雄 先生

(加茂市文化財調査審議会委員)



テーマ「鶴森村 捧家文書より」

【講座内容】

この文書は、鶴森村の名主捧家が幕府や藩から出された民・百姓を支配統治する為の文書である。捧家は今の須田小学校の所にあった。

《従公義御触書書》

虚無僧が村人に旅の宿を頼んだが、困ると断ったところ、虚無僧は村人を尺八でたたき傷を負わせた。これは許されることではなく不屈き者である。代官所へ連れて行かねばならない。もし連れて来なければ村の罪になるので虚無僧を取り押さえて代官所へ連れてきなさい。という内容が記されている。

《安永四年末年 御書附与》

最近、頭巾をかぶり身体を隠す者が多くなって

きた。寛保3年にお触れを出したが、まだ頭巾をかぶる者がいる。安永9年に頭巾の寸法を示してある。様子がおかしかったら、捕まえて奉行所へ連れてきなさい。捕えちがいしても仕方ない。

《乍恐御尋ニ付以書付申上候》

前須田村の信濃川を渡る場所は1か所とする。用をたして、すぐに帰る者は夏秋は麦1,2升か粃1,2升とする。それ以外で渡る者は冬は10文、夏は5~7文を渡り賃として受け取る。と記されている。

《三組岡方山島庄屋共江申聞》

荒地を新たに田畑にしたり、畑を田にしたりすることを制限した文書である。それに対して前須田の組頭と名主は該当するような田はないと答えている。

4 歴史講演会

期日 平成29年11月18日(土)

時間 午後2時~3時30分

会場 加茂市公民館 第1研修室

講師 関 正平 先生

(加茂市文化財調査審議会委員)

テーマ「新発田藩の寛政上知と天保4年の高直し」

一般参加者 25名

【講座内容】

- ・寛政上知で領地替えとなった蒲原郡の肥沃な2万石の村と、陸奥の2万石では年貢高の差があった。寛政4年(1792)4月に当時12歳の藩主、溝口直侯は「上知された蒲原郡の村々は2万石でも年貢高(物成高)は1万5400石余りである。陸奥三郡は高2万石でも物成高はわずか3080石余りで、その差額は1万2300石余りの減収である」と年貢高の数値の差を挙げ旧領戻しを嘆願していくほかないと憂っていた。

- ・上知となった上条村では御役物は全て村高に応じて賦課されていた。しかし、大貫代官に引き渡された寛政2年7月の高と従来用いられていた、貞享元年(1684)届け出の高は相違している村は迷惑した。その理由は、新発田領主時代には、幕府へ届け出た貞享2年の改正高を「現石(年貢定納高)」としていたためであった。
- ・天保2年(1831)幕府から村高を改め、郷帳作成のために提出せよ、と命令を受けた。新発田領の村は、年貢収納高に比して村高が不当に低い村は、幕府領や他藩並みに取米と釣り合う村高に改めて提出するよう求められた。その結果、天保4年、藩は領内の高を従来約10万石から13万2125石9斗として幕府に届け出た。
- ・天保4年8月、年貢米はこれまで通りの率で割り付けるが、高に賦課する国役銀や領内の人夫役などは13万石を割り返した村高にかかったので、村々の負担が増した。

5 特別歴史講演会

期日 平成30年3月3日(土)

時間 午後2時～午後4時

会場 加茂市公民館 第1研修室

講師 五十嵐 稔 先生

(加茂市史編集委員会民俗部会長

・新潟県民具学会会長)

テーマ 「加茂市の神楽舞について」

一般参加者 27名



五十嵐 稔 先生

【講演内容】

- ・神楽は太々神楽・獅子神楽・太夫神楽の3系統に分けられる。
- ・太々神楽は、お祭りの時に神社の神楽殿で行われる。お祭りの後に行われるのが特徴である。
- ・「太々」とは古くから報賽(神楽料)の等級づけから発したと言われるが、後に神楽を賛詞する美称となったと言われる。元は神職のみが舞っていたのが次第に観客を楽しませる演目も出て来た。
- ・巫女(みこ)は神様と人をつなぐ役目であり巫女神楽が発生した。
- ・物を持って舞うことから、採物神楽という名前も使われるようになった。別称「採物神楽」とか「出雲流神楽」とも言われる。
- ・「採物神楽」は麻・榊・笹・鈴・扇・剣・鉾などの物を手にして舞う。
- ・「出雲流神楽」は出雲(島根県)松江市左太神社の採物舞をいい、それが後世、全国に広がったと言われている。
- ・新潟県中越地方の神楽は出雲流の太々神楽である。長瀬神社、青海神社、上興屋向稻荷神社等がそれにあたる。岡ノ町や矢立・下興屋向神楽は獅子神楽である。
- ・獅子神楽には1匹の獅子を2人以上で演じる神楽(大神楽)と小獅子を1人で演じる獅子舞がある。岡ノ町は大獅子である。面白いのは天狗が出てきて踊りが伴う。この形は中魚沼十日町の赤倉神楽と似ている。
- ・長谷の太夫舞は正月の行事として、年頭の祝賀の席で舞われる舞である。太夫は神職の別称で、本来は神職が舞った。

平成29年度の歩み

1 入館者数《平成29年4月～平成30年3月》

	市内	市外	計	団体
大人	230	565	795	3
中学生以下	266	108	374	7
計	496	673	1,169	10

2 資料収集の状況

本年度、下記の方から貴重な資料をご寄付頂きました。お礼申し上げます、紹介させていただきます。

〈寄贈者名及び寄贈品名〉

竹内 義人様（青森市）より 歴史資料 44点
長谷川 昭一様（加茂市）より
蒲原鉄道記念乗車券 3セット
田代 克子様（加茂市）より
古文書資料 628点

3 レファレンス・サービス及びアンケート調査

① レファレンス・サービス（54件）

（民俗資料館への問合せの主なもの）

- ・「村松街道について」の資料を頂きたい。
- ・加茂のマカロニ製造についてお聞きしたい。
- ・加茂鉱山についての資料があれば頂きたい。
- ・「木喰」についてお聞きしたい。
- ・加茂山の成り立ちを知りたい。
- ・日下部鳴鶴の書について調べているが、青海神社にある征清従軍紀巧之碑が建てられている場所をお聞きしたい。
- ・うしろ面の資料が欲しい。
- ・法音寺について教えて頂きたい。
- ・加茂軍議が行われていた場所、その他軍議に係る事について教えて欲しい。

② 来館者の声

- ・青海神社を巡っていて、歴史を学びたかったので大変参考になった。
- ・歴史を感じる物がたくさんあった。
- ・子どもと一緒に昔の技術や文化、道具を学べて大変参考になった。
- ・動画で祭りや道具などの説明があるとよい。
- ・民家の使用したものが懐かしい感じがした。

平成30年度の事業予定

1 社会科出張授業

- ・対象 小学校6年生～高校生（希望する学校）

2 映像で振り返る「懐かしの加茂」

期日 第1回 平成30年8月15日（水）
第2回 平成30年11月27日（火）
時間 午後2時～3時30分（1・2回とも）
会場 加茂市立図書館 視聴覚室
内容 「昔を偲ぶ加茂の風景」

3 古文書講座

第1回 9月 4日（火）溝口 敏磨 先生
第2回 9月11日（火）長谷川 昭一先生
第3回 9月18日（火）関 正平 先生
第4回 9月25日（火）佐藤 賢次 先生
第5回 10月 2日（火）丸山 朝雄 先生
時間 午後7時～8時40分（1～5回とも）
会場 加茂市公民館 第1研修室
内容 未定

4 歴史講演会

日時 平成30年11月17日（土）
時間 午後2時～4時
会場 加茂市公民館 第1研修室
講師 溝口 敏磨 先生
演題 「戊辰戦争150年」（仮）

5 特別歴史講演会

期日 平成31年3月を予定

平成29年度遺跡発掘調査について

本年の遺跡調査は、確認調査が2遺跡、工事立会い調査が3遺跡を対象として行われた。

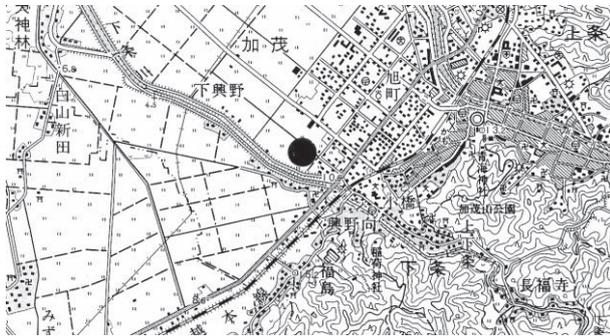
1 中沢遺跡—弥生～近世—

調査地 ①加茂市高須町二丁目地内
②加茂市芝野地内

調査期間 ①平成29年5月31日・6月1日
②平成29年9月26日・27日

調査原因 ①店舗建設工事 ②宅地造成工事

調査の概要 ①10か所にトレンチを設けた。現地表面から約2mほど掘削したが、遺構・遺物ともに確認できなかった。②10か所にトレンチを設けた。明確な遺構は把握できなかったが、5、9、10トレンチから古代の須恵器・土師器が少量出土した。



中沢遺跡位置図



中沢遺跡② 9トレンチ



中沢遺跡② 出土遺物

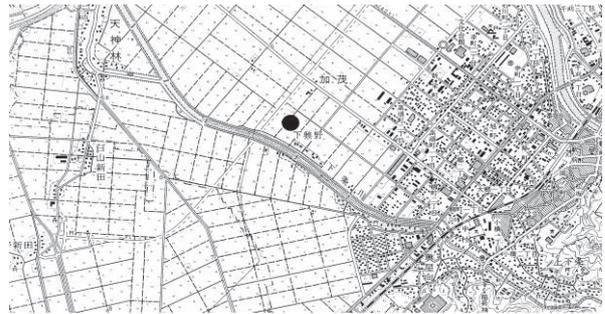
2 鬼倉遺跡—古墳・古代—

調査地 加茂市下条地内

調査期間 平成29年10月3日

調査原因 農業用排水路改良工事

調査の概要 5か所にトレンチを設けた。現在土水路の底面から約1mほど掘削したが、遺構・遺物ともに確認できなかった。腐植物層が厚く堆積し、調査対象地周辺は低湿地であったことが推測される。



鬼倉遺跡位置図



鬼倉遺跡 4トレンチ

工事立会い調査は、7月18日の豪雨で二万年前旧石器公園（丸山遺跡）の法面が崩落した区域の復旧工事に対して10月に、土質試料採取工事に係わる下条地区の山通遺跡と花立遺跡で12月に実施した。



丸山遺跡調査状況

遺跡探訪

千刈遺跡—古墳時代後期の集落—

千刈遺跡は加茂川下流部右岸の沖積地にある。遺跡は昭和48年に行われた大皆川の河川拡幅工事によって知られるところとなった。現在、調査された区域周辺は市街地化が進み、遺跡が調査されたことを実感することは難しい。

当時の調査は写真に見えるように雪が降る3月の厳しい条件下で、排水もままならない中で行われた。残念ながら建物などは確認することはできなかったが、多量の土器を採取することができた。

土器は土師器で内面を燻して黒く仕上げた内面黒色土器と呼ばれる杯が大半を占める。これらの土器は器形や技法などから約1,500年前の6世紀前半で古墳時代後期のものである。調査された当時、新潟県内では古墳時代後期の資料は少なく、編年研究上において重要であった。昭和50年には一部の土器が加茂市指定文化財となっている。土器以外では滑石製の紡錘車や土製の支脚が出土している。



昭和48年の発掘調査の写真（八百枝茂氏撮影）

千刈遺跡は遺跡の範囲や内容も不明な点が多いが、南蒲原地域で数少ない古墳時代後期のまとまった土器群であり、大変貴重である。また、加茂市で発掘調査の記録が報告書として刊行された第1号であったことも明記しておきたい。

（伊藤秀和）



昭和48年 土器出土状況写真（八百枝茂氏撮影）



古墳時代後期の土器

編集後記

皆様のご支援を頂き、本年度の民俗資料館の事業を無事に終えることができました。今回草稿をお寄せ下さいました、中野保榮先生に厚く感謝申し上げます。

加茂市民俗資料館

- 開館時間 9:00～17:00
- 休館日 月曜日、毎月第1,3,5土日曜日
祝日、年末年始
※ 但し、4,5月は月曜日のみ（祝日に当たるときは次の平日）

〒959-1372 新潟県加茂市大字加茂229番地1

TEL / FAX: 0256 - 52 - 0089

E-mail: minzoku@city.kamo.niigata.jp